

イギリス的な情景

— the scenes in Britain —

早稲田大学 教授
小田島 恒志

(第35回)

生活の中の言葉

生活してみて初めて覚える言葉もある。29年前、夫婦そろっての留学生活では、学業に追われ、一切の贅沢とは無縁だった。が、ある日、ちょっとだけ贅沢をしようと、いつも見かけるケーキ屋でケーキを二切れ買うことにした。「どれにします?」「どれもおいしそうで迷っちゃうな」「でしょう?」「じゃあ、これとこれを下さい」というおきまりのやり取りを店のおばさんと交わした後、おばさんがこう言った——「ソヴィエト?」「No, no, from Japan!」「あ、そう、Japanから。で、ソヴィエト?」「いや、だから、Japanですって」「うんうん、で、ソヴィエト?」いったい何が言いたいのだろう?おばさんはケーキの箱に紙ナプキンを入れながらこれを繰り返す。

フラットに戻って、辞書を引いて氷解した。「Serviette (サーヴィエット=紙ナプキン)」と言っていたのだ。「紙ナプキンもつけましょうか?」と。日本に帰ってからこの話を知り合いのイギリス人にしたところ、「ああ、その言葉、うちのおばあちゃんも使ってた」とのこと。こっちが知らないのも無理はないということか。

この時暮らしたフラットが、かなりの年代物だということは前に書いた。フラットへの入居の際

は、Inventory (属具明細書)に基づいて、備え付けの家具の確認をする。バスルームの明細に「dryer」とあったので、妻と喜んだ。「古い古いと思っていたけど、ちゃんとヘアドライヤーがあるのはありがたいね」電力240ボルトのイギリスでは日本の100ボルト仕様の電化製品は、変圧器を通さなければ使えないからだ。だが、いくら見渡してもバスルームにそれらしきものは置いていない。「あのう、このdryerっていうのはどこにあるんですか?」と大家さんに聞くと、大家さんが黙って指さしたのは——タオル掛け。温泉宿の部屋によくある、細い金属製のパカッと広げて使うあれだ。なるほど、dryer=乾かすもの、ね。

所変われば品変わる。日本で壁に何か貼りたければセロテープか画鋏で留めるのが定番だろう。ところが、大家さんから「何か貼りたければ〇〇を使ってね」と言われても何のことかわからなかった。その後、在英の日本人と話していても、皆当たり前のように〇〇で貼っというてね、と言う。それがBlu-tackという、粘土のような(汚い言い方だが、ガムの噛みかすのような)代物だということ、実際に使うまでわからなかった。今も、ガムを噛み終わるたびについ思い出してしまう。